

幸☆開拓の苦勞をささえた花祭り

明治～昭和の高師原

起伏に富んで広がる

高師原は、農民が手をつけない荒地であり、住む人も管理する人もいなかった。明治40年以降、陸軍兵士の演習地となり、おもに騎兵部隊の訓練が展開される。

大正14年以降、士官学校や高射砲連隊などが置かれ、砲声のとどろく日々が多くなった。

戦後、演習の跡を生々しく残したまま放置された。



開拓が始まる

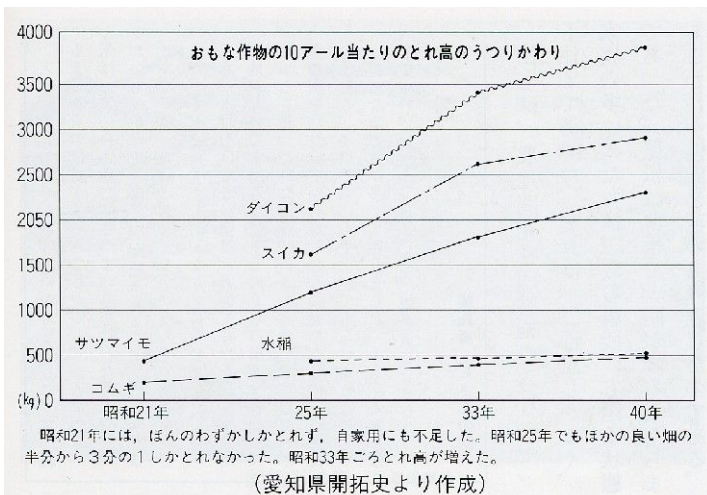
戦後の食料不足は深刻であった。そこで国はこの広い演習地を開拓し、人々に食料と働く場所を提供しようとする緊急開拓事業を決めた。9月、新しい土地に希望を持つ人々が、この開拓地、高師原に集まってきた。

開拓の苦勞

でこぼことした荒地を平らな耕地にすることは大変な仕事であり、ほとんどの土地は入植した人たちの血のにじむようなひとくわひとくわによって開かれていった。

食料、飲み水、住宅、電気にも不自由し、台風などの災害を受けながらも、人々は農作業にいろいろな工夫を重ね、開拓を進めていった。

実った努力



その後畑作・稲作も進む。また、豊川用水が完成してからは水の心配もなくなって苦勞してきた生活も楽になり、多角的な農業経営を目指すようになった。

市街化された高師原

その後幸校区はほとんどの地域が市街化された。今、この豊かな台地で文化的で便利な生活を営んでいるが、この地には汗水流して働き、多くの苦勞をしてきた開拓者の努力があったことを忘れずにいたい。

花祭り

北設楽郡豊根村から入植してきた人々は、苦しい生活の中で助け合い励ましあって暮らしていた。

昭和23年、開拓者の守り神として御幸神社を建立。新しい土地に住みつくために、郷里の神々も一緒に移し、神の加護を受け生活に希望を持とうと考えた。

神社だけでなく花祭りの神事も伝えようと、正月4日、御幸神社に集まり花祭りが盛大に行われた。

花祭りの中で、1年の苦勞や郷里の思い出を語り合った。

世代がかわった今でも、花祭りは引き継がれている。

